

蕨書道連盟 会長

齋藤 葩雪 さん

輝いています

ひと

筆にこめる未来への思い



お手本を用意する齋藤さん

書

歴55年、凛とした姿で筆を進める齋藤葩雪さん（80歳・南町4丁目）。蕨書道連盟の会長として、伝統文化の書道を後世に伝えるべく、日々活動しています。

長女が一歳になり、育児に慣れてきた頃、書道に本気で取り組みたいと思いつき、通信教育を受講し始めます。興味を持つと努力を惜しまない齋藤さん。5年で師範に合格すると、早々に千葉県四街道市で教室を開設し、たくさんの子どもたちに書道の楽しさを伝えながら、後に文化功労者となる小山やす子さん自身も約10年間師事するなど、華やかな書風を追い求めます。44歳の時に蕨市へ転入した

齋藤さんは、「書を愛し、研鑽に励んで来た人たちをつなぎ、蕨の文化を発展させたい」という連盟の理念に賛同し、入会します。市展や南町文化展など、蕨の文化芸術のために献身的な活動を続け、平成26年に会長に就任。長年、日本文化の象徴である文字を美しく書く喜びを、子どもからお年寄りまで伝えてきた齋藤さんですが、時代と共に薄れゆく書道文化を憂慮していました。そんなある日、近所のお母さんから「書道の宿題は家庭では教えられない」と相談を受けました。その時「いよいよ書道がなじみのないものになっていく」と危機感を覚え、書道連盟主催で夏休みの課題を題材に講座をしませんと会員に呼びかけました。齋藤さんの熱意に「書道文化のためならば」と皆さんがボランティアで講師を務め、今月6日に講座を初開催します。「文化の継承はもちろん、子どもたちに書道は身近で楽しいと感じてほしいです」とお手本を書くその姿から、強い使命感が伝わってきます。書道へのひたむきな思いがこもった美しい文字は、未来への道しるべとなるでしょう。

今月の河鍋暁斎記念美術館

天才絵師の作品 蕨にあり

—No.87—



暁斎筆「猫を捕まえる鼠」色紙判錦絵

猫が鼠たちに生け捕られていきます。袴姿や鎧で完全武装した鼠もいるようで、猫もこうなつては降参するしかないようです。暁斎はこの作品と同じ構図の肉筆画も描いています。明治6年（1873）に来日、同13年（1880）に帰国した英国人外科医のウィリアム・アンダーソン（1842〜1900）に依頼されたもので、その作品は現在、アンダーソンが寄贈した膨大な日本美術コレクションとともに、大英博物館に所蔵されています。



現在の茨城県古河市に生まれる。浮世絵や狩野派を学び、江戸・東京の庶民から人気を博す。明治9年、万国博覧会に肉筆画を出品。14年、内国勲業博覧会で日本画の最高賞受賞。娘の暁翠も日本画家。



かわなべ きょうさい
河鍋 暁斎
天保2年（1831）
～明治22年（1889）

河鍋暁斎記念美術館 開催中

企画展「暁斎・暁翠 いきもの百科」展
同時開催 特別展「第37回かえる展」

開館 = 午前10時～午後4時
休館 = 火・木曜日、毎月26日～末日
ところ = 南町4-36-4
入館料 = 一般600円 高校生・大学生500円
小・中学生300円 65歳以上500円
※65歳以上は年齢の分かる物、学生は学生証をご提示ください
詳細 = 同館（☎441・9780）



展示会の詳しい内容は美術館のホームページを御覧ください

